

軍色が強い学校生活  
当時、吉川小学校では男女が別教室で授業をしていました。食料配給の時代だったため、家が農家で米はあっても、ぜいたく品とされていたので、弁当は芋などを混ぜてないといけませんでした。軍への招集があったら、隣近所が集まって出兵する人を見送りま



▲敵戦闘機から落下してきた葉きょう(市文化財センター所蔵)

たりもしていました。飛行場を攻撃するための戦闘機は、東から来て物部川を渡るまで撃たれないようにとても低く飛んでいたため、地上からパイロットの顔を見ることができました。機銃を撃った時に出る葉きょうがたくさん落ちていて、それらは集められて日本軍の弾などの材料になると噂されていました。

した。小学校でも習った軍歌を歌いながら歩いて歩いた子どもたちも。音楽だけでなく絵本なども戦争に関するものが多く、子どもまで戦争に勝つべしと意気高揚させられていた感じでした。運動会では戦争に行っても役立つ体験ができるように、投てきなどが競技になっていました。敵国のリーダーの似顔絵に石を投げつけるようなこともありましたが、今思うと和やかという雰囲気ではありませんね。しかし、当時は誰も不思議と思わなくこれが普通の考えや行動だったように記憶しています。旧制中学校では木銃を使つての訓練や運動場で地べたを這うような軍事教練をしていました。学校にいた間は徴兵はありませんでしたが、2年生になると、少年戦車隊など任意で兵役に志願できる資格を持つことができました。13〜14歳で戦争に行くこと自分で決めることができたわけですから、今考えるととても恐ろしいことです。終戦間近の中学校では授業がもうありませんでした。ひと月に一度の登校日を除き、勤労奉仕をする毎日でした。私たちは野市から電話線を引

# 戦争と平和 生活の中に戦争が あった少年時代

岡本 正さん(吉川町)



第2次世界大戦終戦から今年で73年。当時のことを知ることが平和維持の第一歩として、広報誌では毎年当時を知る語り部たちの体験談を掲載しています。  
今回は当時、吉川町で小学生だった岡本正さん(86)に話を伺いました。今と戦時中では、学校や日常生活がどれほど違ったのでしょうか…?

## 自宅に兵隊が住んでいた

戦時中、我が家には普通寺の師団から派遣された兵隊が常駐していて、終戦前には30人ほどになつていました。中には特攻隊で出撃するための人も。本来の家の持ち主である私たちは一部の部屋で生活し、他の部屋は軍が自由に使っていました。

近所の分家には炊事班もいて、炊飯したものを周りの民家に常駐していた兵隊へ配つて回っていましたね。焼き物小屋も接収されて銃弾や火薬などを保管する弾薬庫として利用されていました。

家は米軍機から見えにくくするため、白壁を黒く塗っていました。蔵にはまだその頃の名残があります(※左ページ写真)。夜は照明が外に漏れないようにしていました。明かりが点いているのが外からわかると叱られるんです。

く手伝いをしました。高射砲の陣地が近所にあつてそこまでの連絡網用でした。野市町の西町(現在の職能短大の辺り)から川に沿って道路の真ん中を5センチメートルほど掘つて電話線を埋設していました。毎日作業現場まで通い続け、ちようど吉川の自宅辺りまで電話線が来た時に終戦になり、そのまま作業も終了しました。

## 今の世代の皆さんへ

終戦が近づくとつれ、実は日本は劣勢であつて、国からの放送は本当のことを言っていないということが多くの人々が感じてきていました。戦争当時は規制された中で生活を強いられていたはずなんです、その頃はそうは思わず「普

当時、原則的に電気は夜に使うためのものであつて、昼には電気が通っている家庭は少なかったんです。我が家には昼にも電気が来ていて、周りに使ってもらつたりもしていました。その時の配電盤の一部が残っていて、今もまだ使っています。



▲自宅に残る当時の配電盤。今でも現役だ

## パイロットの顔が見える

時折、家の真上を米軍の戦闘機が海軍飛行場(現高知龍馬空港)へ向けて飛んでいきました。現在の高専の運動場に海軍の整備工場など重要な施設もありましたから、それらも攻撃の対象だったでしょう。大きな爆撃機は三宝山の上空に集合し、北の方へ飛んでいっ

通の毎日」だと心から思つて過ごしていました。

「国のために」と送り出されたたはずの兵士たちのうち、戦死した方々、負傷して帰ってきた方々はどうな思いをいだいていたでしょう。私には複雑な思いがずっと続いてきました。

いろいろなことを刷り込まれ、正しくないことまで正しいと思わせる…、戦時中はそんな生活でした。だからこそ、『時代の風潮に流されないように、自分で判断でき責任感がある人であつてほしい。』ということは今に代に伝えたいですね。戦争は絶対にはげらるんのですから…。

時代の風潮に流されないように、自分で判断できて責任感がある人であつてほしい。

